論説

『無神論者のミサ』に見るバルザックの哲学、宗教、政治思想

La philosophie, la religion et la pensée politique de Balzac dans *La Messe de l'athée*

佐野栄一

バルザックの哲学、宗教、政治思想

バルザックの哲学というとき、その主要な内容は、事物の根源を探求する始原論的哲学、と言ってもいいだろう。始原論哲学は、西欧に一神教が、つまりキリスト教が広まり、中世に誕生したあらゆる国家の中心に、教会と、教会と密接する王権が君臨するようになって、死滅した。万物の根源には神があり、あらゆるものの様態も現象も神の論理によることになったからである。そのとき、人間の在り方にも神の論理の網が被せられる。神には創造の意図があり、神学を通じてそこに絶対的正義の根源を求めようとする。どう生きるのか、何をなすべきか、生きる意味も価値も、すべては神から発する。

人間は万物の一部にすぎないが、自然の一部として自然なままに生きる動物ではない以上、人間集団の上に君臨して集団を律し平和をもたらす超越的なものが必要となる。その必要を神の論理が充足した。神の論理は人間の作り出すあらゆる掟や法の上位にあるから、神によって、集団をまとめ上げる価値の体系が作り上げられる。こうして、絶対権力者となった神は、おのずと人に似ることになるだろう。神は、人を自分の姿に似せて作ったのではなく、人が、神を自分の姿に似せて作った、ということだろう。

人格化した神は、神の意図の統一化とその意図の広範な伝播のために教会を作らせ、教会を通じて人の倫理を説くとともに、それに照らして人の為した善と悪が量られることになった。神は最後の審判者となり、それを経て人が最終的に向かうべき天国と地獄が作られた、そう考えるのが自然である。

この宗教は、千数百年にわたって西欧社会のすみずみに浸透することで、いつしか抜き去ろうとしても抜くことのできない血の一部となり、人の行動を制御してきた。だから、神の死は、価値の裏付けがなくなることであり、西欧的倫理体系が崩壊することである。人はどう生きるべきなのか、意味のある生き方とは何なのか、それを教えてくれるものが何もなくなる。もしそうなったとするなら、人は、もはや生きる価値、行動の価値を、自分自身ですべて決めるしかない。かつてサルトルは、「人は自由たるべく呪われている」と言ったが、この自由という呪いを引き受けるだけの深い知性と思考力と、高い見識と強靭な精神を持つ者がどれだけいるのか、彼には、他者は、社会は、どう位置づけられるのか。自由は、野獣を解き放つこととともなりうる。社会の中で暮らす人が、生きる意味と真剣に向き合ったとき、神が死んで普遍的で不動で確固とした規範や倫理など、この世のどこにも何も存在しない、と、もし心底から了解したとするならば、暗黙のうちに価値ある行動に努めてきた誠実な人間が絶望しないはずはない。だが、そうした混乱が起きないのは、今も昔も陰で、キリスト教倫理が西欧社会と西欧人の心を支えていたし、いるからであろう。

現代、われわれは科学の進歩によって、万物の根源にビッグバンがあると考えるのが合理的だと知っている。そのビッグバンを起こしたのは神なのか何なのか、その先はもうわからないが、バルザックの生きた十九世紀前半とは、神に対する認識に大いなる変化があるだろう。少なくとも、いま、キリスト教の神の人格神的側面は相当に希薄化し、教会が説いてきた天国や地獄を単純に信じ続けている人は、おそらくごく少数となっている。だが、たとえ神が存在するか否かに関心がなくなったとしても、神が裏付けとなって作り出された西欧的価値体系は信じられ続けている。そこには、意識するしないにかかわらず、暗黙に神が生きている。おそらく、公然と自己の信念として無神論者であると言うことは、アナーキストだと言うに近い語感を持っているに違いない。

バルザックは一七九九年、フランス革命が勃発した十年後に生まれている。フランス革命は、王権と不可分の関係にあったカトリック教を否定した。しかし、政府はまもなく、カトリックの神に代わる「最高存在」を打ち立てねばならなくなり、その後はついに、コンコルダによってローマ法王と和解にいたることになった。カトリックの神は、王権神授説によって絶対王政の王権力を支えてきたというだけではなく、凡そフランスの人と社会とを支えてきたものだったからである。つまり、カトリックの神の問題は、フランスの文化や社会制度の根幹を支える最重要な政治問題でもあることがわかったのである。

バルザックは好奇心の人であり絶対の探求者である。彼は、十八世紀の啓蒙時代の諸科学を、大学で学んだわけでも個人的に誰かの教えを受けたわけでもなく、ただ一人で、とても人間業とは思われないような短期間に、集中して書物を渉猟し、思考し、総合して、自分流の哲学を作り上げた。その哲学によれば、万物の根源にはただ一つの実体がある、といい、そこからすべてのものが生成するが、実体には万物生成の原理そのものが内包されている。それは、いわば万物に必要なすべての要素とプログラムが予めそろっているただ一つの

「万物の遺伝子」のようなものだが、かと言って、実体は「物」ではなく、しかし「物」でもある、霊気のような存在と捉えている。それがバルザックの考える神である。

この神は、始原論的根源であって、人々の信仰の対象となる神とは全く異なっている。その存在は正義とも倫理ともまったく関係がない。もしそうした信念を、当時の信仰の在り方から「無神論」と言うのだとすれば、バルザックは無神論者である。しかも、その無神論は、「純粋で率直な無神論」、「多くの学者や世界で最も優れた人々の無神論に似た」無神論、「とうてい打ち破ることのできない無神論者の無神論」、「宗教を信じる者にはそのような無神論者がいるなど容認することができないような無神論者の無神論」である。つまり、この小説の主人公デプランの無神論こそバルザックの無神論であろう。

無神論は、社会の基盤となっているキリスト教的価値体系を破壊する。その価値体系が神を前提とする以上、当然の帰結である。その意味で無神論は反社会的であり、人々からは、人々が衣服のごとくまとっている馴致された既存の社会的規範や道徳に異議を呈しているのと同様なのだから、身勝手で利己的な信念と映る。それゆえ、バルザックは、デプランは「人生において孤立していた。その利己主義のために、彼の栄光も今日では消えている」と描いている。彼の信念も、信念に由来する行動様態も、多くの人々からは、その由来がわからなければ不可解であり、そうとわかれば容認できないものであり、結局それは、「利己主義」と同義なのである。

だが、デプランの比類なき天才性と「利己主義」とは、表裏一体のものである。デプランは「神のごとき一瞥」を持っていた。「修練によって得られたものか、天性によるものなのかはわからないが、彼には直観的に患者とその病を見通す力があった。その直感によって、彼には、一人一人みな違う、いかなる診断でも下すことができたし、大気の状態と患者の体質的特性を考慮しながら、手術すべき正確なときを、時、分の単位まで

正確に決めることができた」。「こうして自然と共に歩むために、彼は、大気に含まれる、あるいは大地が人間に供給する、根源的実体と人間とのあいだの絶えざる連関を研究してきた」。しかし、その学は「伝授不能」なものであり、「すべてが個人的なもの」であった。彼は「学問全体をその一身に凝集」していたが、それを普遍化し体系化しようとはしなった。結果として、ビアンションのように、後に学派を率いて人類の科学と歴史に貢献し、パンテオン入りすることはできなかった。デプランは、「わが身にすべてを備え、わが身とともにすべてをあの世に持って行った」のである。

彼は、その天才によって、学究と臨床の経験を通して深遠な独自の生命観、自然観を持つにいたった。それが無神論の土台となった。だが、その「神のごとき一瞥」は医学領域にだけ投じられたのではない。人間とその社会にも投じられ、同じく人間と社会に対する独自の判断と価値観を生み出している。両者は一体となり、デプランの思想を形成している。

「デプランにおいては、その栄光と学識とは非難の余地のないもの」で、彼のような「偉大な人間にあっては、様々な性質が互いに密接な関係にある」。「天才はみな当然のこととして精神の視覚を持っている。いくつかの特殊能力は、この視象によるのかもしれない」。この能力によって「彼自身そう考えているように、彼は外科医として偉大になりえたと同様に、大臣になっても偉大になりえたろう」。だから「デプランの並はずれた矜持を、人間を忍耐強く執拗に観察してきた者なら、当然のこととして認めよう」。「彼は人間を上からも下からも観察してみて、また最も厳かなあるいは最も卑小な生活における人間行動の中に不意に現れ出る真実の姿を見て、人間に対して深い軽蔑を抱くに至った」。

デプランは、自然を観察し、人間を観察し、社会を観察して、独自の哲学と価値観を持つにいたった。それによって、あらゆる固定観念や価値観・道徳観から自由になった。彼のあらゆる行動は、この思想に基づいて

いる。しかし、傍人にはそれが伺い知れない。「彼には、まったくもってイギリス人がよく言う、エキセントリック、というような性質があった」。「ぶっきらぼうになったり温厚になったり」、「見かけは貪欲で吝嗇そうだったが」、ある人たちのためには「自分の全財産を使ってもいいほどの度量があった」。人々からは気まぐれで矛盾しているように見えるデプランの不可解な行動や姿は、しかし、彼の思想に照らせば、おそらく整合したものである。神を信じなければ神によって作り上げられた倫理も信じないこの天才は、それにかわるものを持つにいたったのである。そして、その思想に高い矜持を持ち、それがゆえに、外聞に動じないし、頓着もしない。それを理解できない他者には「エキセントリック」なのである。畢竟、デプランは、自己の持つ思想によって自由だった。真の意味での自由、見方を変えれば恐ろしい自由、呪われた自由、スーパーエゴイストのみが持ちうる深遠な重い自由を持っていた。

では、この「利己的」で「エキセントリック」な天才が、この世界でもっとも大切に思い、最高の価値を見い出すものは何なのか。それは、ブルジャの愛、貧しい水売りの愛、なのである。彼が人間世界に見る最も美しい大切なもの、それがその愛なのである。

ブルジャは、孤児で、貧困で、卑しい生業のために蔑まれ、生涯独身であったが、その心には、「注ぎたい愛情があふれ」ており、その対象をデプランに見出した。そして、デプランが優れた知性と能力を持つ人間であることが分かると、彼には「使命」があると理解し、その「使命」を果たさせるために、彼の必要は自分の必要に優先する、と考え、身を削って尽くす。しかも、相手に心の負担をかけまいと繊細なまでの心配りをする。それは「高度な領域にまで高められた庶民の献身」だった。

もちろん、愛は無償の献身だけでは長く続けられるものではないだろう。そこに自己実現と心の充足がなければならない。ブルジャは、献身することよって、自分が優れた作品を生み出すような喜びを享受していた。

「ブルジャの誇りは私だった。彼は、私のためにそして自らのために、私を愛していた」。その意味で、彼は対価を得、献身も愛も互いにとって意義のあるものだったと言うことができるだろう。しかし、そのありようは並外れていた。ブルジャの代償は、献身する相手の自己実現だけにあるのである。デプランが立派な医師となり、出世して、いい生活ができるようになること、それが彼の望みであり喜びであって、そこに自分を混在させない。ブルジャは、「私の最初の成功を見て酔っていたが、『この男が成功したのは私のおかげだ』とでもいわんとする言葉も、態度も、みじんも見せることはなかった」。それが、この貧者の愛があらゆるものを超絶した高貴さ美しさを持つ理由であり、「美徳の権化」である理由でもある。ブルジャには己がないのである。もしそういう言い方ができないのであれば、彼の己は、愛する相手の喜びの中に、ただデプランを愛することだけにあった。ブルジャのささやかなエゴは、生みの苦しみの渦中にあった偉大な「利己主義者」を、透明な膜のように包み、育み、守ってやることにあった。

このようなブルジャを作りだしたものは何なのか、それはカトリック教だった。彼は「貧しい民衆の純朴な信仰を持」ち、「自分の妻を愛するように聖母マリアを愛していた」。彼には、「家族もなく、友もなく、妻もなく、子もな」かったが、ただ「堅い信心があった」。

デプランはビアンションとカトリック教について語るとき、「才気煥発な無神論者の口説を次から次に浮かんでくるがままに語って上機嫌」となり、「ヴォルテール流の冗談を連発」して、「『引用集』のひどいパロディ」を展開した。そのとき、彼は、信念に基づいて、カトリック教に対して嘲笑と軽蔑を浴びせていたのである。ところが、このカトリック教が、いやこのカトリック教だけが、ブルジャを作り上げることができる。「貧しい民衆の純朴な信仰」、気高い「お針子の愛」を作り上げることができる。

それでもデプランはカトリック教を否定できるだろうか。

否定するだろう。ビアンションとカトリック教について話すときには、再び彼はカトリック教を嘲弄し罵倒するに違いない。しかし、ブルジャのカトリック教を否定することはできない。それは、彼にとって最も価値のあるもの、美しいものであり、何にも代えがたいものなのである。「誓って言うけどね、ブルジャの信仰をわたしの頭に入れられるならば、私は全財産を使ってもいいよ」。仮定は現実の事実に反するから立てられる。デプランは、カトリック教に対する疑いをブルジャの信仰によって消し去ることなどできない。しかし、その信仰が作り出したものをどんなものより価値があるものと見ている。

自分が独占したこの崇高なものに、デプランはどのように対したらいいのか。報いたらいいのか。ブルジャの寿命が尽きようとするとき、デプランは懊悩する。「私は彼をもっと生かしておきたかった。自分（ブルジャ）がどんなことをなしたのか見てもらうために」、また「私の心を満たしているただ一つの感謝の念を何とかして満たすために、いまでもなお私の心を焼く炎を鎮めるために」。そのとき彼は思い出すのである。「夜、ときどき、彼は未来に対する恐れを口にすることがあった。充分に清い生活をしてこなかったと恐れていたのだ」。「彼は私に、おずおずと、死者の平安のために捧げられるミサのことを話したことがあった。それをさせるのにかかるお金のことを考えて、そんな義務を私に課そうなどという気持を持ってはいなかった」にもかかわらず。

ブルジャがデプランを「私のためにそして自らのために」愛していたように、自己実現を遂げたデプランも、ブルジャを、彼のために、また、自らのために、愛しているのである。死の床についたとき、ブルジャは、既にそれまでの献身をとおして自らの愛をすべてデプランに表しおおせていた。しかし、デプランのブルジャへの愛は、対象を、表しうる機会を、突然の死がすべて奪い去り、これ以上もう永遠に表せられないままに終わってしまうことになる。その無念の炎が、デプランの心を焼き、鎮まることがない。

そのとき、デプランは、彼のために自らのために、唯一できることといえば、「彼の篤い信仰心からきていた望みをかなえてやることだけだ」と考える。それはまた、自分の心の炎を鎮める唯一の手立てでもあるのだろう。かくして「各季節の始まりのミサが挙げられる日に、彼の名でそこに行き、彼のために、彼が望んでいた祈りの言葉を」デプランは唱える。「懐疑論者の衷心からの気持ちを込めて」。（傍点筆者）

デプランはミサでの祈りが空しいことを知っている。知っていながら、「神よ、もしこの世で全き行いをなしたものが死後入れられるべき世界があるのならば、善良なるブルジャのことを考えたまえ」と祈る。死後の魂の存在を信じないデプランが、唯一自分が可能なこととして、死者のために死者の望みをかなえることは、まったくの矛盾である。しかし、そのとき、デプランは、ブルジャの宗教を否定しながら、ブルジャを作った宗教を肯定しているように思える。原理としてのカトリック教を否定していながら、カトリック教が人の心に作り出すものを肯定しているように思える。さらに言葉を変えれば、宗教を否定しつつも、制度としてのカトリック教を肯定しているように思える。それは、バルザックの政治思想そのものである。無神論者バルザックは、ハンスカ夫人に宛てた手紙の中で、「政治的には、私はカトリック教徒です」（傍点原文。一八四二年七月十二日付）と述べている。